

「サビツイタ裸女」誕生

山内重太郎

約二年間にわたる空白のあと、本年一月はじめのある深夜、突如として、僕のアン・フォルメール風の仕事が始まった。それまで、ドラン風の静物や、風景など、理屈ばったコチコチの絵を描いていた僕としては、全く、それこそ平野に火山が噴出したような変貌の仕方であった。

僕は、五日間で十枚ほど、手法もいろいろと変えて、実験的な試みをした。ホワイトを板に塗りつけ、その上を引っ掻いてデッサンし、部分的にガソリンで焼いたり、原色を板に置き、それを焼いては、ところどころナイフで引掻いてみたり、いろいろなことをやって見た。そしてその時、アン・フォルメールが、如何に僕の体質に合っているか、またそれによって、最も現代的な、非情にして尖鋭な表現を会得したような気がした。

それから約五ヶ月、五月の下旬まで、生米の怠惰から、一点の作品も描かず、不毛の時間が空しく流れていった。四月の中旬であつたか、岩田屋で開かれていた桜井孝身、石橋泰幸 二人展を見た。僕は、二人のたくましい意欲に全く圧倒され、同時に自分自身をかえりみて、ひどい焦りを感じた。

二人展の最後の日に『若い画家の集い』があつて、五月の第一日曜に、再び各自が作品を持参して、房屋という喫茶店に集った。「サビツイタ裸女」の原型である、白っぽい六号の裸女を持って行った。そしてこの会合でメンバー全員が、西日本美術展へ出品することに話がきまった。

それから数日後、独立展の会場で、桜井氏に会った。『西日本美術展の作品はできているか』と聞かれたので、僕はつい、五十号を三点下塗りしていると答えてしまった。おまけに、四、五日後に、越智、石橋氏と三人で、作品を見に来て貰う約束までして終つたのである。しかし、ほんとうはまだ何の用意もしていなかった。とうとう、自分で自分を、土壇場に追込む羽目になってしまった。

その翌日、モチーフが見つからぬままに、ともかく、六号の裸女を三十号に引き延ばすことにして、その日のうちに、大体描きあげてしまった。焼き直したので予期以上にうまく行った。

三氏に来て貰う日が迫ってきた。五十号の下塗りをしただけで、前日になるまでまったく何も浮かんで来ない。思いあまつた僕は、前からデッサンしていた、デュビュッフェ風

の風景を描くことにした。はじめたのは夜の十時頃であった。全く思うように行かない。三時間余りも、キャンバスを相手に苦闘したあげく、とうとうあきらめて、ホワイトで塗りつぶしてしまった。

翌朝七時頃目覚めて、床のなかから、塗りつぶした画面を眺めていると、下半部の面に人間の足らしいものが見える。そして、ほとんど同時に、女のイメージが浮かんで来た。僕は、あわただしく起きあがって、チューブから絵具を出す間ももどかしく、イメージを追いながら、無中になって描きつづけた。約一時間で描き上げ、あとガソリンをかけて焼くだけのところで止めた。

三氏は、作品を見て「西日本美術展は大丈夫だ』と言ってくれた。桜井氏は、ローソクの煤で調子をつけることを教えた。僕はガンリンで焼く方法を公開した。焼くことによって、絵具の質が変化し、不思議な美しさが出た。更に、ローソクの煤で調子をつけると、特異な味わいが出て来た。最後に、三十号のバックを濁色から深いブルーに変えて完成した。

斯くして僕の「サビツイタ裸女達」は生れでたのである。